

ご あ い さ つ

佐賀大学教育学部附属養護学校 校長 後 藤 忠 雄

教育についての定義づけの中で「教育とは子どもをよくすることである」ということばがあります。必ずしも教育科学的なことばではないかも知れません。しかし、障害児教育も又、とどまるところ「子どもをよくすること」であり、「子どもがよく生きる」ことがめあてであるべきでありましょう。私共が障害児達の教育を受ける権利を守り、彼等の成長、発達をめざす、真の人間教育実践に結びつくものとは何か、一般教育も障害児教育もともに人間教育であるという認識をもつことは当然であり、言を俟ちません。

さて、これらの理念に依って歩んで参りました本校の教育実践が、昭和53年度開校以来どのように取り組まれて参ったのか、その一端がこのたび第3回目の研究協議会、第3集目の研究紀要によって公開することになりました。

ダイジジェストしますと、当初「児童、生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」という研究課題を柱として、第1年目は「指導内容を中心にした検討」第2年目は「課程そのものをどのような形にすべきか」第3年目は「編成上の問題点を明らかにする事例研究の取組み」等をテーマとして研究を進め、この3ケ年を以て第1期計画と致しました。

それらを総合してみても、一応の成果は認められるものの、内容、方法について多くの反省点が残って来ました。実態をとらえる視点、方法、分析の共通理解のための「発達評価表」（仮称）や、社会生活参加への適応能力に対する「要請水準表」（仮称）等の作成の必要性、日生、生単、作業学習と他の学習領域との関連を明らかにする内容研究等、その他について次期にもちこすことになりました。ここで56年度以降の3ケ年を第2期計画とし、56年度は「領域、教科を合わせた指導」57年度は「教科（国語・算数・数学）養護・訓練の指導」58年度は「特別教科活動、道徳の指導」の三つに分け、児童、生徒の12年を見とおした縦の系統を考えた具体的な指導内容と実践の手だてについての研究に進むことに致しました。今回の発表によって課題編成における問題点は、従来よりかなり明確にされて来ることと思われまふ。

まこと、基本的生活習慣、社会適応性確立という現象面のねらい、それに至る遠い道のりをどう埋めるか、教科とは何か、成立の条件は何か、悩みとよろこびの錯り合いの中に研究、実践している私共であります。

どうか、この道に志されておられます諸先生方の暖かく、きびしいご批評を載ければ幸かと存じています。

又、この機会に、本校のためご熱心にご指導下さいました教育学部の学部長、特殊教育教室、教育学、心理学教室及び各教科の教官各位に対し厚くお礼申し上げます。

おそくなりましたが、ご多忙もいとわず、わざわざご講演を賜ります千葉大学教授、小出 進先生に深く感謝と敬意をあらわさせて載く次第であります。

昭和58年 5 月31日

これまでの研究のあゆみ

本校は、53年4月に開校された。それ以来、「本校の児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」というテーマを柱に研究をすすめてきた。

これまでの研究の経過を概略すると、大きく二つの段階に分けられる。

1. 第一期（53年度、54年度、55年度）は、それぞれの学部を中心として、「実践 ⇄ 反省」を主体とした取り組みであり、「実態に応じた教育課程の編成」という研究の柱をふまえながらも、三学部で、一貫性のある指導内容段階表の作成までには至らなかった。

副テーマとして「社会生活適応能力の向上・育成をめざす教育」をかけた。小学部では、「日常生活の指導や養護・訓練などを通して、集団生活への適応能力を育てる」ために、どうすればいいのかを中心課題としてきたし、中学部では、「生活単元学習の指導を通して、集団生活に慣れ、自主的な態度・習慣を身につけ、自分から進んで集団への参加ができること」を検討し、高等部では、「農耕・園芸や家庭一般を通して、社会人としての基礎的な態度・知識・技能を養い社会的自立のために必要な体力、働く意欲及び習慣を身につけさせる」という、社会人としての基礎的生活能力を育てることに重点をおいた研究に取り組んだ。

しかし、研究の成果を「研究紀要 第一集（54年度）」にまとめてみると、児童・生徒の実態の把握が部分的であったり、「日生、生単」などの指導内容と、他の領域との内容との関連性が不明確であるなど、不備な点が多かった。

そこで、55年度には、同一テーマを継承して、研究内容を焦点化した。小学部では、「全体学習」という特設された時間帯を設定し、学級集団のわくをはずし、その中での集団への適応能力の可能性を追求してみた。中学部では、総合学習の中で、身辺処理能力の向上と生活経験の拡大・定着を図り、集団生活への参加能力を高めることをねらって指導内容を精選し、教育課程を編成した。高等部では、「農耕・園芸」と「家庭一般」にしばらく、社会生活に適応するための能力の育成を図った。しかし、次のことが問題点として、まとめられた。

- ア 児童・生徒の実態をとらえる時の視点や方法、分析をする上での共通な基盤が明らかでない。→共通理解に基づく「評価・段階表」の必要性
- イ 全校的に系統立てられ、一貫性のある「指導内容表」の作成が必要であろう。
- ウ 総合学習で取り上げた指導内容表と他の領域（例えば、教科、養護・訓練）との関連をどのように考えるのか。

さらに、重度化、多様化していく児童・生徒の実態に応じた指導の目標・内容・方法の構造化と、それにともなう指導体制のあり方等も論議された。

2. 第二期（56年度、57年度、58年度）

第一期の状況は前述の通りであり、新設校であるため、「児童・生徒の実態をどうとらえるのか」その実態を受けて「何のために、どのようなことを教えるのか」ということが主な研究内容

となった。

その取り組みも、各学部毎に研究が進められたので、指導内容が構造化され、具体的プログラムが組まれた学部や、指導内容にからめて、指導方法をいかにするかという具体的実践の方向をさぐる学部もあった。しかし、それぞれの学部での研究が、他の学部の実践と結びつかない面も見られ、全職員の共通理解を得るには至らなかった。

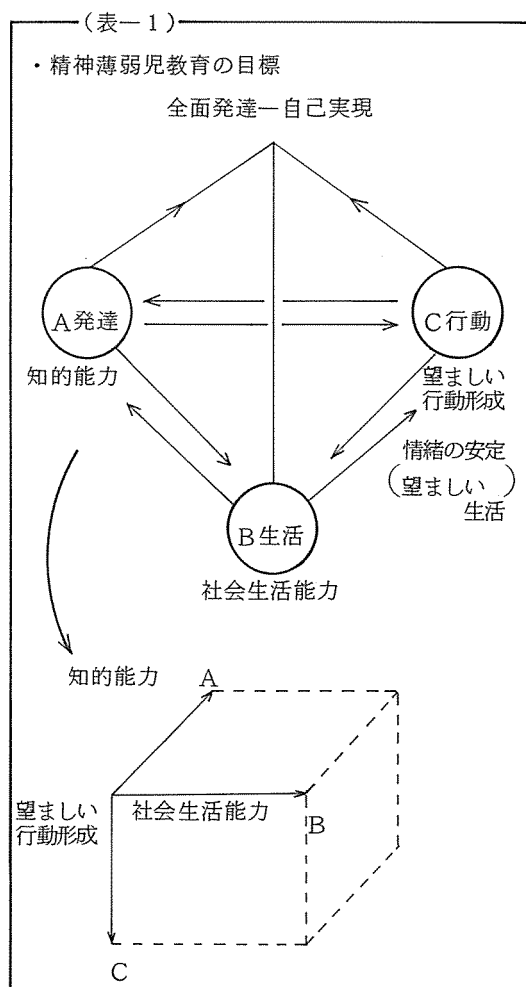
そこで、第二期では、「本校の児童・生徒の実態に応じた教育課程の編成と実践」という大きな研究の柱は継承しながら、全校的な計画と実践のあり方、つまり、各学部で、一貫した指導内容の編成とそれを作成するための共通の基盤を確認し合う段階にはいった。

56年度は、「領域・教科を合わせた指導」

57年度は、「教科（国語，算数，数学），養護・訓練の指導」

58年度は、「特別教育活動・道徳の指導」

と三つのブロックに分け、12年間の縦の系統を考えた具体的な指導の内容と実践の手だてについて研究を進めつつある。



。56年度は、「精神薄弱教育の目標」と「指導内容の各領域毎の関連」について確認することからはじめた。

この表は、児童・生徒の全人的教育の目標を考える一つのめやすとして図式化したものである。

全人的能力を一つの立体と考えると、全面発達の総和は、立体の体積だとも考えられる。言いかえれば、人間の力は、 $(A \times B \times C)$ の積であり、それぞれの方向へと長く（深く広く）成長するほど、調和のとれた、全面発達が期待できるとも言える。

私達が児童・生徒を教育する目標は、このように、知的能力を中心に運動機能、感覚機能などの諸能力の発達を促進すること（A）、社会生活能力を身につけさせること（B）、社会人となるための望ましい行動形式を図る（C）という三つの柱が基本となることを共通理解した。

それ等をふまえながら、55年度までの研究成果を発展させるため、前述のA、B、Cの目標を含めた上で、「指導内容表」と「指導形態」の関連に配慮しながら、一覧表にしたのが（表一2）である。

(表-2)

・ 中心テーマの確認と相互補助関係

	指 導 内 容	指 導 形 態					
		遊び	日生	生単	作業	教科	養・訓
A 発 達 面	運動機能（基本的運動パターン）	◎					◎
	感覚機能	◎					◎
	知覚・認知機能	◎					○
	ことばコミュニケーション	◎		○		○	○
	概念（教科前学習）			○		○	
	教科学習			○		◎	
※ B 生 活 面	基本的生活習慣の確立		◎	○	○		
	健康保持と安全生活		◎	○	○		
	集団への参加	○	○	◎			
	学校生活への適応		○	◎	○		
	自然事象の認識と処理			◎	○	○	
	家庭生活に関する知識と技能		○	◎	○	○	
	社会生活に関する理解と経験			◎	○	○	
	職業生活に関する知識・技能・態度				◎	○	
C 行 動 面	情緒の安定	◎					
	問題行動の改善	◎					◎
	望ましい行動形成		○				
(D)	言語治療						
	機能訓練						

この表は、(A)発達面、(B)生活面、(C)行動面の指導のねらいを考慮しながら、(D)に養護・訓練の要素を加味し、指導の内容を分類し、それ等がどの指導場面で、達成されるのかを一覧表にしたものである。

・ 指導形態の表の中に「○印」と「◎印」があるが、重要な目標を「◎印」とし、主な目標を「○印」としている。空欄は、何もないということではなく、補助的目標の一つであると見てほしい。

この表によって、中心テーマの確認と各領域毎の相互関係が理解できたことと、教育の内容と指導場面が一応、構造的にとらえられた。

上述のことがらをふまえながら、総合的学習（遊び、日生、生単、作業）の指導のあり方を求めて、「指導内容要素表一試案一」を作成した。その過程に、これまでの実践（53年度～55年度）を盛り込み、小・中・高の一貫性をめざしたことは、言うまでもない。

（表-3）は、「指導内容要素表一試案一」を要素群にまとめ、(B)生活面の指導内容の項目（表-2）にそって、整理したものである。

- ・ 57年度は、教科別指導、養護・訓練のあり方を求めて、特に「教科（国語と算数・数学）、養護・訓練」の指導について、児童・生徒の実態に応じて、指導内容を編成した。併せて、望ましい行動形成を育てるための指導体制のあり方についても、配慮していった。

国語グループでは、「書く指導」の内容段階表を作成し、算数・数学グループでは、「数と計算」の領域で、細かな指導過程を考え、養護・訓練グループでは、障害の状態に応じた、より効果的な指導体制、指導方法を考えるための具体的取組みを事例として述べている。

(表-3)

B 生活面に関する内容表の項目群

項 目	グループ	日 生	生 単	作 業	遊 び
基本的な生活習慣の確立		1. 食事 (配膳・配膳、後片づけを除く) 2. 衣服 (着、洗、拭) 3. 排泄 4. 清潔		1. 作業のしかた (服装)	
健康保持と安全生活		7. 健康	7. きまり (日常生活上の約束)		
集 団 へ の 参 加			5. 役割 (役割) 7. きまり (集団行動上の約束)	1. 仕事へのとりくみ (9.集合時間)	2. ことば 3. 集団への参加 4. 生命力・生き生き・のびのびと
学 校 生 活 へ の 適 応			4. 交際 5. 役割 (係活動) 6. 手伝い・仕事 (学校での手伝い) 10. 社会のしくみ (身近な人—6.7.8.9.10.11) 12. 行事・祝祭日—2	2. 対人関係 (①—①, ②—①あいさつ)	
自 然 事 象 の 認 識 と 処 理			9. 自然 (道具や機械—5.6.7.8を除く) 12. 時間		
家庭生活に関する知識と技能		1. 食事 (配膳・配膳、後片づけ) 2. 衣服 (着、洗、拭) 5. 清掃	6. 手伝い・仕事 (衣服、食事、住まい) 10. 社会のしくみ (身近な人—1.2.3.4.5.12) いろいろな職業—1.2.3.4.	1. 作業のしかた (そうじ)	
社会生活に関する理解と経験			7. きまり (交通ルール) 8. 金銭 10. 社会のしくみ (いろいろな職業—5～11) 社在地 行事・祝祭日—2以外 社会のできごと 11. 公共施設の利用	2. 材料・生産物 (④金額)	
職業生活に関する知識・技能・態度			5. 役割 (作業) 6. 手伝い・仕事 (学校での仕事) 9. 自然 (道具や機械—5.6.7.8.)	1. 作業のしかた (服装・そうじを除く) 2. 材料・生産物 (④計算を除く) 3. 用具 1. 仕事へのとりくみ 2. 対人関係 1.移動 2.固定 3.分解 4.組立て	※ 1. 運動機能 5. 遊具とのかかわり

※ 2. 材料・生産物 (④計算)

それぞれのグループで、どのように「テーマ」を設定し、どのように内容段階表を構成し、どのように実践してきたかについては、次の項に詳細に記述している。

57年度のテーマを、「教科（国語，算数・数学），養護・訓練の指導」としているが，研究内容は部分的である。できあがった「内容段階表」にしても，「養護・訓練の実践事例」にしても，暗中模索の状態であり，研究は，まだ，緒についたばかりである。テーマにそって，研究が完成するのは，58年度の課題を一通り終えて，59年度から，第三期計画として，指導内容の全領域に亘る研究と指導方法についての研究を進めてからのことである。

私達の「研究のすすめ方」について，あるいは，「これまでの研究のあり方」について，先輩方の御批評をいただければ，幸いに思います。